

2001 家庭内のゴミ箱

Trash box for domestic life

AD 01 赤羽 正名
指導教員 比留間 真

1.研究目的

近年リサイクルできる商品が増え、ゴミ問題の対策が増えてきているが、2006年度の高井戸ゴミ焼却場のパンフレットによると回収されているのは43%しかない。リサイクル率を上げる為に全体量の6割(旭川市家庭ごみ有料化実施計画原案より)を占める、家庭ゴミの対応が必要である。

2.調査と分析

まずゴミ箱を提案する上で、高井戸ごみ焼却場に見学に行き、分別すべきごみの種類を調べた。分別の種類は地域によって異なり、私の住む中野区の場合、可燃ごみ、不燃ごみ、缶瓶、ペットボトル、資源プラスチック、古紙類、電池など、7種類にも及ぶ。しかし、市販されている家庭でのゴミ箱を見ると、可燃ごみ、不燃ごみだけのゴミ箱しかなく、牛乳パックやスチロールトレイは置き場所がなく、洗い場付近の棚の上などに置かれている事が多い。また電池など、ごみの種類によっては回収頻度も違うため、置いておく場所に困ったりもする。しかし、分別の種類に対応するよう、ゴミ箱の数を増やすと場所をとってしまうので、デザインを考える必要性がある。

また、家庭のゴミ箱には、公共施設にあるゴミ箱のように、可燃ごみ、不燃ごみに対しての視覚的な表示がされていないので家庭での分別意識を少しでも高めるために必要だと感じた。

3.コンセプトの立案

- インテリア性に配慮した外観
ゴミ箱の雰囲気を感じさせないようにする。
- 分量と種類によって対応出来る分別ゴミ箱
フレキシビリティのあるデザインを考える。
- 分別を視覚的に表示する
さりげなく解かるようにデザインをする。

4.デザイン展開

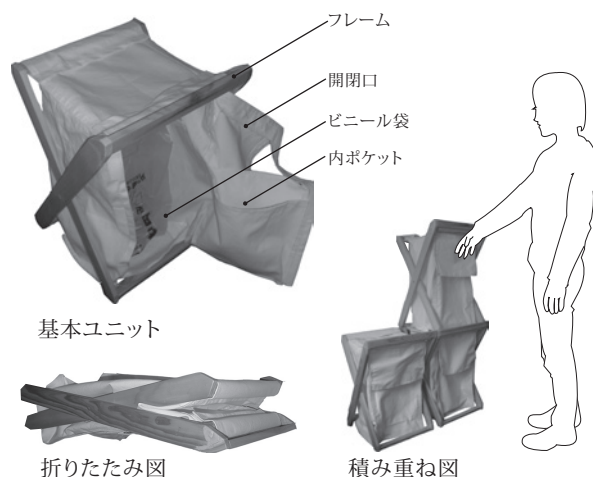
室内のゴミ箱としてスペースを有効に使う手段を考え、ユニット構造を採用する事にした。それによって縦方向、横方向に拡張出来るようになりごみの種類や分別数、容量の差への対応を可能にし、さらに本体ユニットは必要に応じて折りたたみ収納可能になっている

また、インテリア性を重視して、ゴミ箱という雰囲気を出さないようにするため、家庭にあるような素材で構成しようと思い、木材のフレームを外側に見せ、内側にキャンバス布地を使った。木材はあまりゴミ箱の存在を強調しないように淡い褐色を持ち匂いはほぼ無臭のエゾ松を使用した。構造上、ボルトを使った箇所が目立ったので木を押し込んで処理をした。

電池や、スチロールトレイ、紙パックなどは、大きくなく、薄いのでカバーの内側のポケットに収納出来るようになっている。

視覚的な分別については、文字で書いてあると見苦しいので、燃えるごみは赤い糸で一部を縫って、表現し、燃やさないごみは青色の糸、資源ごみは緑色の糸、と目立たないようさりげなく解かるようにデザインをした。

5.完成図



6.結論

このゴミ箱を、実際に使ってもらった所、部屋の雰囲気に合い、様々な分別が出来ると評価を得た。

しかし台所に置いた場合、素材が汚れやすい布や木を使っているため、生ゴミを捨てづらいという指摘を受け、今後の改良点だと気付いた。

7.参考文献

- ・1995『ごみと環境年鑑』日本年鑑出版局
- ・2006 高井戸ゴミ焼却場のパンフレット